

「研究と創造」と「モノづくり」 産業技術記念館

館報 赤レンガ

インタビュー

造本作家・デザイナー 駒形 克己氏

中を開けばワクワク、ドキドキ。
本に触れる面白さを、世界中に伝えたい

フォーカス

赤レンガの景観美と建築遺産

vol.
47

モノづくり体験実習

最近、携帯電話やインターネットなどを駆使することには長けていても、「現物でモノを確認しようとしていない」、「実際のモノづくりを知らない」人が増えているように感じます。また、企業の設計の現場でも、3次元CADなどの高度な機能を使いこなすのは得意でも、実際には「図面を読めない、書けない」「モノを見てもそれが何かかわからない」若手技術者が増えているように思います。

当社では、昨年より新入社員全員を対象に、豊田佐吉翁の「研究と創造の精神」から生み出され、「トヨタ生産方式」の原点でもある、「G型自動織機」に触れながらモノづくりの基本を学ぶ「モノづくり体験実習」を始めました。

“G型自動織機”は天井からのベルト一本のみで駆動するシンプルな構造ですが、生産性向上や品質確保などを実現するために、さまざまな知恵と工夫が盛り込まれています。

その特長である「異常があれば止まる」「不良品を出さない」「人を機械の番人にしない」など、いわゆる「自動化」の思想の原点を入社直後の社員に理解してもらい、モノづくりの思想をしっかりと受け継いでほしいと考えています。

「モノづくり体験実習」のカリキュラムは、動態展示の実機を見て学び、たて糸切断自動停止装置の原寸モデルでポイントを学び、手作りの1/3モデルの分解・組付けでより理解を深めるという3段階にしました。実習では、設計、部品形状、保全性、耐久性、組付け、調整の工夫を勉強します。教材を手作りした講師やスタッフも、電気的なセンサーの全くない時代に発明された、全てカラクリ的に作動する仕組など、佐吉翁の設計思想に改めて感心したようです。既に受講者は、累計で850名を超えました。

今後も教育内容の改善を継続しながら、佐吉翁の思想を受け継ぐ、基礎・基本に強い人材の育成をめざしていきたいと考えています。

次代を担う若い方々が、産業技術記念館に動態展示されている「G型自動織機」をご覧になり、「モノづくり」の大切さと「研究と創造の精神」をご理解されますことを、心より期待しております。



とよだ てつろう
豊田 鐵郎さん
産業技術記念館 理事
株式会社豊田自動織機 取締役社長

中を開けば ワクワク、ドキドキ。 本に触れる面白さを、 世界中に伝えたい

インタビュー



「私は能力の差というのは、物差し長さで決まるのではなくて、むしろ目盛りの数だと思っています。目盛りの数を増やすことが、仕事の精度を上げることに繋がっていくはずですよ」

プロフィール

こまがた かつみ
駒形 克己さん

1953年静岡県生まれ。造本作家・デザイナー。日本デザインセンターで3年間勤めた後、1977年に渡米してCBS本社（ニューヨーク）などでグラフィックデザイナーとして活躍。帰国後、1986年にONE STROKEを設立し、カード絵本などユニークな創作絵本を出版。1994年からは個展やワークショップ活動を世界各地で開催。ポローニャ国際児童図書展特別賞、スイス国際児童図書賞（F.E.E.）特別賞、ニューヨークADC銀賞など多数を受賞。主な著作には「SERIES LITTLE EYES」や「紙の絵本シリーズ」などがあり、近年では知育玩具、視覚障害者向けの絵本などを積極的に制作発表している。



LEAVES：視覚障害者も健常者も共に楽しめる「触れる本」。仏国立近代美術館、ポンピドゥーセンターとの共同出版。



LITTLE EYES：開けば思わぬ絵や形が展開する「道具としての絵本」シリーズ。娘とのやり取りから生まれた代表作。

いつも何か不足している感じがあった

小学4年の写生大会でした。白い校舎に夕陽が映えるのをどうしてもうまく表現できなくて、派手なピンク色に描いたら、先生が心配して色覚異常の検査を受けさせられました。結果は問題なかったのですが、母親が学校に呼ばれた時に、「父親が不在な家庭なのでメンタル面に問題があるんじゃないか」と言われたのを偶然に聞いてしまった。それから色彩に対して自信が持てず、30歳頃までずっとコンプレックスのようなものを抱えていました。うまく表現できない自分を変えたい、色に対して自信を持ちたいという気持ちが、デザインへの道を選ばせたのだと思います。

それから日本デザインセンター※1への入社が決まり、デザインアシスタントとしてスタートすることができました。社内には大きな図書室がありましたが、そこで欧米のデザイン関係の書籍をいろいろ見ているうちに、横文字文化に憧れを抱くようになり、もっと何かできるんじゃないかと思ひ、それで思い切って会社を辞めて、渡米しました。英語は当初まったく喋れなかったのですが、なんとかなるんじゃないかと思って(笑)。

どこかで集中して頑張る時期を持つことが大事

アメリカでは、デザイナーとしての最初のハードルを越えるのが大変でした。ロスアンゼルスからニューヨークへ。いろいろな仕事をしながらポートフォリオ(作品集)を作り、これはと思う会社をアプローチ。でも大抵はポートフォリオを預けに行くだけで仕事には繋がらず、ニューヨークでの生活も3ヶ月が経ち、いよいよお金も底をつきかけた頃、CBS※2のデザイン部門でのデザイナー募集のチャンスが訪れました。それまではどこへ行っても作品を持ち込むだけで終わっていたので、思い切ってポートフォリオを小さなサイズにしてみたんです。電話をすると、いつも通りに「ポートフォリオを届けに来てください」と言われ、「小さいので紛失されたら困る、直接見せたい」と伝えると、対応に困った係の人から電話を代わったのがアートディレクター。面白がってくれて、直接会える事に。結果として後日のプレゼンは大成功でした。

ニューヨークでは「9時から5時まで」が徹底していますから、残業はむしろ能力がないからと思われ、慣れない当初は山のように仕事を抱えて、とにかく夢中で仕事をしていました。あの必死で仕事をした

一時期があるから、これまで頑張れた気がします。長い人生を生き抜こうと思うと、人間、どこかで集中して物事に取り組む体験をしておいたほうが良いと思います。

体験と言えば、生活体験から日本を対比して考えることがよくありました。日本は「気付きを作る」文化だと私は思うんです。言葉で言わなくてもわかる、そういうサインをさりげなく出して、相手も察して行動する。茶室の「手掛かり※3」が好例だと思いますが、頑^{かたく}々な文化では決していないのです。

愛娘のための自作絵本から「世界のコマガタ」へ

帰国後、1年間は会社に務めたのですが、もう独立する時期でもあったのでフリーになりました。でも最初の1年間は全く仕事が無かったんですが、その間にプロポーザル(提案書)を工夫しながら、「仕事を受ける」のではなく、むしろ「仕事を作る」ことをめざしました。これはアメリカに居た時「仕事を作ってこそプロ」と言われたことがあって、ずっと自分にとっての課題でもありました。

それから結婚して、娘に恵まれ、ある時ふと気付いたのですが、じつと私を見ている生後3ヶ月の娘の視線に出会うんです。ああそうか、母親とは十月十日一緒だったけれど、こちらはただのオジさんなんだろうなと。それで、娘と一緒に遊ぼうと思って、絵本を作ってみたのです。考えてみれば母親が選ぶ絵本はあっても、案外父親から見せられるような絵本は見当たらないんですね。見える形が次々変わるように工夫したのを百種類以上作り、娘もとてもよく反応し、それで周囲の勧めもあって、創作絵本として出版することになったのです。

ところが、思うようには売れませんでした。中身を開いて初めて面白さが伝わる私の絵本は、店頭で馴染まず、書店では扱いにくいことがわかりました。それなら自分で流通まで責任を持ってやってみようということで、「ONE STROKE※4」を立ち上げたわけです。

今後も、紙質や色彩を活かしながら、本の可能性を求めていきたいと思っています。量に向き合いコストを優先させる方法ではなく、まず質と向き合い、その上で適性な量とそれに見合う価格を見出せたらと思います。子どもばかりではなく大人が見ても「面白い」と思ってもらえる、そんな本をもっと作っていきたいですね。

※1：日本の商業デザインの草分け的存在として知られ、巨匠と呼ばれるような有名デザイナーを多く輩出している。1959年設立。

※2：NBC、ABCと共にアメリカ三大ネットワークのひとつ。テレビ放送のバイオニアとしても知られる。

※3：茶室の玄関の引戸を意図して開閉しておくこと。1寸ほど開けておくことと客を迎え入れるサインになり、隙間を閉じれば中へは入れない合図になる。

※4：駒形氏が代表を務める出版社。強弱も太細も自由自在に描ける「一筆書き」を意味している。



九州大学病院小児医療センター：「もりのお医者さん」をコンセプトにした一連のサイン計画は2006年度ユニバーサルデザイン賞を受賞。



「1,2,3...KOMAGATA」展：ポルトガルで開催された展示会。



BLOCK'N BLOCK：5本のつみ木を組み合わせ、百通り以上に絵が変わる知育玩具。2007年度グッドデザイン賞に輝く。



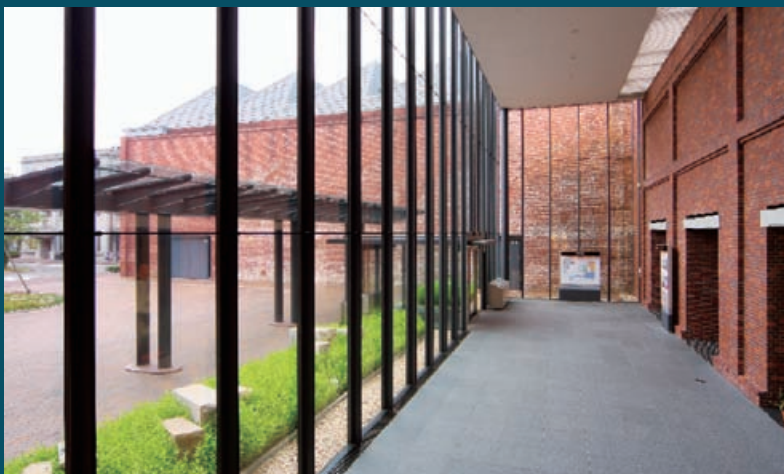
このコーナーでは、展示物をはじめとした記念館関連の
1つのテーマに焦点を絞って紹介していきます

豊田佐吉に始まる「研究と創造の精神」と「モノづくり」に関する歴史と情熱を今に伝える
ミュージアムで、景観美を醸し出す赤レンガ造りの壁や、建物の見どころをピックアップ。

赤レンガの



トヨタテクノミュージアム産業技術記念館を訪れると、まず目に入るもの。
それは、赤レンガの景観ではないでしょうか。この地は、豊田佐吉が自らの
発明による自動織機や環状織機を試験し完成させるため、1911（明
治44）年に「豊田自動織布工場」を設立した場所です。赤レンガ造りは、
その当時の面影を今に伝えるもので、明治・大正期の工場の特徴を示
す貴重な建築遺産であり、産業遺産でもあります。今回は当館のシンボ
ル、そして本誌の愛称にもなっている「赤れんが」を中心に、知られざる
景観美や建築遺産としての見どころをご紹介します。



景観美と建築遺産



赤レンガ壁が美しく映える建築遺産

名古屋駅から北へ約1.3km。徒歩でも20分ほどの距離ですが、紡績工場が造られた約百年前はまだ名古屋市へ編入前でした^{※1}。佐吉^{※2}はここに約3,000坪の用地を購入し、織機研究の試験工場を建設しました。当時の工場は木造平屋建てで、赤レンガ造りになったのは、(旧)豊田紡織が設立された1918(大正7)年のことです^{※3}。工場は1982年まで操業を続け、その後は一部が倉庫として活用されていましたが、明治・大正の工場建築が次々と姿を消していく



(旧)豊田紡織 栄生工場(1941年)

中であって、建築遺産としても貴重な存在になっていました。そこでヨタグループ^{※4}では、赤レンガの建物をグループ全体の歴史的遺産として保存しながら、広く社会に役立てていきたいと考え、「研究と創造の精神」と「モノづくりの大切さ」を次代に伝える「産業技術記念館」の建設を決めました。そして、施設の設計にあたっては「心と技の伝承」をテーマに掲げ、赤レンガ建築など貴重な建物の保存・再生に向けて、積極的に取り組むことになったのです。



産業技術記念館(2005年3月)

過去の遺産に現代の技術が融合

明治・大正時代に隆盛を見たレンガ建築は、1923(大正12)年に関東大震災で多数が倒壊したことから脆弱性が知れ渡り、その後は急速に姿を消すことになります。本工場でも震災の2年後に建てられた事務棟(現・ヨタグループ館)以降は、鉄筋コンクリート造りを採用するようになりました。老朽化したレンガ造りの建物をどのように保存・再生していくかは、施工する上での重要な問題でした。そこで事前に栄生工場を詳しく調査^{※5}して検討を重ねた結果、総面積

3,300m²に及ぶレンガ壁はすべて鉄筋コンクリートや鉄骨で補強して、建物の構造体ではなくデザイン要素となる外装材として活用することにしました。

このように、耐震性のない大正期のレンガ壁を補強して現代の耐震基準に適合させた「設計技術」に加え、レンガ壁を壊したり転倒させることなく速やかに工事を進行させた「施工技術」は、まさに今日の先端技術の成果と言えるでしょう。



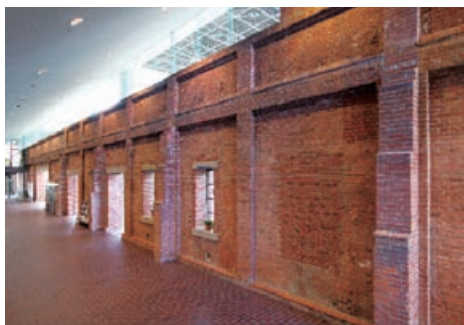
外壁補強



内壁補強

動力の庭を囲む赤レンガの壁

赤レンガの壁や造作は、建物の内外にさまざまな形で見ることができます。正面入口からのエントランスギャラリーには、かつて工場の建屋を造っていた壁が続きます。その壁を隔てたロビー中央には当館のシンボル展示である環状織機が動態展示され、ガラス壁を隔てた向こうが赤レンガの壁で囲まれた美しい広場「動力の庭」です。かつてここには「汽罐室」や「汽機室」*8などがあり、織機の動力となる巨大なスチームエンジンが稼働していました。



エントランスギャラリー



動力の庭



新旧のレンガ

広場を囲む高さ9mのレンガ壁の上部には、幅が7mと13mの二つの「塵突」*5があります。これは紡績工場には付きものの綿ほりや糸クズを外へ吸い出すための設備。そこから隣り合う壁には、工場特有の鋸型屋根*6の痕跡が見られます。そして、もうひとつ注目していただきたいのは赤レンガの一個一個。どれも同じように見えるかもしれませんが、大正期のレンガとともに、当館の建設時に特注された新しいレンガも混じっています*7。

国内最大規模のリユース事例に

レンガ造りの他にも、木造やコンクリート造りの貴重な建築遺産があります。木造部の代表的な見どころは、「繊維機械館」*8にズラリと並ぶ檜の列柱。林立する柱はかつての工場建築によく見られたもので、空間そのものが「心と技の伝承」を語りかけてくるようです。当館の着工は1992年。開館はその2年後の豊田喜一郎*9生誕百周年となる1994年6月でした。工事の過程では、解体コンクリートの再利用による地盤改良や廃材

を利用したタイルの開発など、環境保全と省資源化に繋がる多彩なアイデアが盛り込まれ、建物の保存・修復を支えました。こうしたさまざまな努力と工夫の結集によって誕生した当館は、古い建物をできるだけ残して新しい活用を図った「リユース(再使用)」の好例であり、国内では最大規模の事例と言えるでしょう。東海地方では数少ない建築遺産として、また産業観光に欠かせない学びの拠点として、当館の役割はますます大きくなっています。



列柱



豊田商会事務所



豊田自動織機 旧鉄工場(現・創造工房)

※1：当時の住所は「愛知郡中村大字栄字米田」だった。
※2：豊田佐吉(1867～1930)：1926年に豊田自動織機製作所を創業し、今日に至るトヨタグループの礎を築いた。
※3：同じ頃に建設された赤レンガ建築では、横浜赤レンガ倉庫(1911、1913)、東京駅(1914)、大阪市中央公会堂(1918)などがある。
※4：産業技術記念館は豊田自動織機やトヨタ自動車をはじめとしたトヨタグループ13社の共同事業として設立。
※5：西洋建築史学の権威である名古屋大学飯田喜四郎名誉教授を委員長とする「栄生工場建物調査委員会」が、1987年に詳細な建物調査を行い、断面図や立体図などの図面作成とともに過去の補修状況などを把握した。
※6：鋸型屋根は採光のために工夫された形状で、工場では四季を通じて明るさの変化が少ない北向きを採光面にしており、東駐車場から自動車館を見ると、その形や採光の様子がよくわかる。
※7：大正期に造られたレンガは三河で生産されたもので、それ以外では当館建設時に、①知多、三河や大垣の5社から取り寄せたもの、②トヨタ自動車など3社が廃棄物を原料にして開発したもの、③レンガに類似したタイルが使われている。また、レンガは水圧洗浄などにより大正期の風合いが再現されている。
※8：繊維機械館は1919年に造られた旧紡績工場を利用し、当時の木造部をよく保存している。
※9：豊田喜一郎(1894～1952)：佐吉の長男で、トヨタ自動車の創業者。

来て・見て・覗いて レンズからくり 江戸・明治

開催期間

8/9(土)～9/7(日)

「トヨタコレクション」は、日本のモノづくりの源流とも言える、主に江戸中期～明治初期の「からくり」、「測量・天文」、「銃・大砲」、「医療」、「絵画・書画」、「工芸」、「生活」などさまざまな分野にわたる貴重な科学技術資料です。

今回はレンズをテーマにした資料を展示・紹介いたします。レンズを用いた道具は、まず人間の目の働きを補う「眼鏡」として、次にその機能を拡大する「望遠鏡」や「顕微鏡」として発達しました。さらに、記録を残すために「カメラ」が考案され、また、絵や写真を拡大して投影する「幻灯器」が作られました。

今日の生活には欠かすことのできないレンズが、眼鏡として日本に伝わって以来、江戸から明治時代にかけてどのような機器に使われ、またどのような使われ方をしたのか、当時の資料や記録を用いてご紹介します。

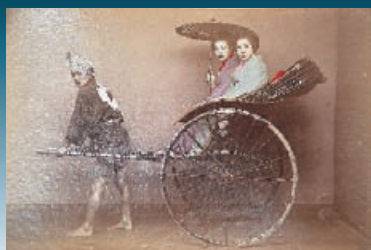
木製顕微鏡 (江戸後期)

本体が木製の顕微鏡です。鏡筒部分は竹の表面に和紙と漆を塗り重ねた「一閑張り」の技法で装飾してあります。当時、蘭学者や蘭方医、本草学者を始め司馬江漢のような画家までもが顕微鏡のミクロな世界に興味を持ったと言われています。



横浜写真 (明治初期)

1860～1890年代に、外国人や写真術を学んだ日本人が、日本の風景や風俗などを撮影した写真です。これらは、白黒写真に手描きで着色され、日本を訪れた外国人の日本みやげとしてたいへん好評でした。横浜が製作の中心だったので「横浜写真」と呼ばれています。



グラヴェールガラス望遠鏡 (江戸後期)

ガラス表面に模様を彫り込む「グラヴェール」という技法を用いた美しい望遠鏡です。中央の接続部をはさんで内側を朱色と萌葱色もえびに塗り分け、グラヴェール部分には外側から金や朱などの彩色を加えて模様を際立たせています。



懐中眼鏡 (江戸後期)

べっ甲製の老眼鏡です。ひもを耳に引っ掛けるタイプで、携帯に便利のように紙製の袋がついています。鼻の低い日本人用に「鼻押さえ」が工夫されています。



四切判木製組立カメラ (明治中期)

蛇腹式の木製組立カメラです。四切判(30.5×25.4cm)の乾板(感光剤をガラスに塗って乾かしたもの)を、取枠という木製のフォルダーに入れて撮影します。絞りは、差し込み式の金属板を使い、取枠の遮蔽板とレンズキャップを開閉することで露光させます。



記念館アーカイブス

当館のみどころは
繊維機械館、自動車館の他にも盛りたくさん。
ここでは館内でご覧いただける興味深く、
貴重な資料のいくつかをご紹介します。

図書室 繊維・織物関係をはじめ、科学、技術、産業、自動車、ファッションなどの蔵書が約6万冊!

産業技術記念館図書室ホームページ(WEB上から蔵書検索が可能です) <http://www.tcm.it.org/institution/library.html>

初回シリーズとして「染織」関連の蔵書をご紹介します。そもそも染織とは、布を「染める」と「織る」ことの総称です。

■ 第2回「インドの染織」

世界の染織王芸の宝庫といわれるインドには、絹、木綿、毛などさまざまな素材の染織品があり、その技法も多種多様です。

その中でも、上質な木綿糸で織られた布地に手描きや木版の技法で花鳥や唐草、動物などの文様を描いた「更紗」、そして緋織かすりおりの源流と言われている織細で緻密な織物である「パトラ」が代表的です。

また、さまざまな色の毛糸を用いて綴織つづれおりや刺繍ししゅうを施されたショールなど、その質においてもデザインにおいてもすばらしいものが多く作られています。

今回は、さまざまな染織布を集めた資料集や、カラー写真の豊富な大型本、デザインや図案が掲載された図書を紹介しましたが、これ以外にも多くの蔵書があります。ぜひご覧になってみてください。



インド 大地の布
岩立広子著 求龍堂発行 2007年
インドの伝統染織
マリ・ルイーヌ・ナポルソン・カルタジヨフ著 紫紅社発行 1986年
インドの染織
長寿を祝う会編 源流社発行 1984年



インド染織資料集成 (ラージャスターン)
インド染織資料集成編集委員会編 岩崎芸術社発行 1997年



印度更紗
吉岡常雄著 京都書院発行 1975年



印度の織文
加納豊広編 京都書院発行 1975年

ビデオライブラリー 戦前から現在に至るまでの歴史的な記録映像やオリジナル映像などが約300点!

■ 「国産自動車発達史」

1935 (昭和10) 年を過ぎたころ、まさに国産自動車の黎明期れいめいと呼ばれた時代、日本がどのような自動車事情にあり、トヨタ自動車トヨタ自動車がどのような状況で車を生産していたかを紹介した映像です。

当時の日本の自動車保有台数は、アメリカに比べ約200分の1と非常に少なく、大金を払ってアメリカから自動車を輸入していました。

映像では、当時の鋳物工場や鍛造工場、トヨタG1型トラックやAA型乗用車の組立ラインの様子などがご覧になれます。中でも、AA型乗用車が蒸気機関車と競争して抜き去るシーンは圧巻です。また、当時開催された自動車博覧会や、皇族の方々が熱心に自動車工場を見学する様子も紹介されており、当時の人たちが自動車に対して、如何に大きな憧れや強い関心を抱いていたかを窺い知ることができます。



AA型乗用車の組立



蒸気機関車との競争

伊賀くみひも

な かうち ひとし

三重県組紐協同組合 理事長 中内 中さん
中内工房 代表



“くみひも”とは、絹糸を斜めに組みこんで織った紐のことであり、帯締めや羽織紐は和装小物として和服に欠かせないものです。歴史は奈良時代まで遡り、仏具や神具、武具の装飾品として用いられてきました。

伊賀がくみひもの産地としての第一歩を踏み出したのは、明治35年のこと。江戸でくみひも技術を身につけた広沢徳三郎という人物が、故郷の伊賀でくみひも工場（通称：紐屋）を設立したのがその始まりです。

中内中さんは、祖父の代から続くくみひも職人。祖父は広沢徳三郎氏の親戚にあたり、明治37年に紐屋を始めてから二代目の父、そして三代目の中さんへと匠の技が受け継がれてきました。

「私のところは創作性の高いくみひもを特徴としています。一般的なくみひもには具象的な柄が描かれていますが、うちは模様ではなくひもの組み方、つまり組織にこだわり、仕上がりが立体的です。それは父が開発した手法でした」という中内さん。手間ひまを惜みず、熟練の職人が3日間かけて仕上げる“中内の帯締め”は独特な造形美を持ち、和装愛好家の間では高級品として知られています。一本一本の絹糸がしっかりと組まれて組織が密になった中内さんの帯締めは、棒のようにピンと立ち、「これがいい帯締めの証拠だ」と胸を張ります。

中内さんは、和装品としての高級くみひもづくりに取り組む一方で、「親父の仕事を真似ていたのでは成長がない」と、創作活動にも励んできました。大学で焼き物や金工^{きんこう}※を学び、卒業後はジュエリーの製作に携わってきた経験を活かして、「若い頃は貴金属をあしらったくみひもなど、親父とは違うオリジナリティを追求したこともある」といいます。



中内工房の場合、帯締めを使う組玉の数は約70玉、ネクタイであればおよそ100玉。糸を巻きつけた組玉の重みで糸に適度なテンションを与える。



何本もの細い糸を組んで作られるくみひも。組台の上で左右に振り分けた糸を規則的に移動させ、交差した部分を竹べらで叩いて締めていく。トントンと打つ強さ加減でくみひもの弾力性が変わり、組子（くみひも職人）毎にそれぞれのクセがある。



組み上げる糸の長さ和本数を調整する経尺（へいじゃく）工程。職人たちは“下ごしらえ”と呼ぶ。慣れないうちは糸が絡んだり、糸の摩擦で指を切ったりすることもあるという。

そして現在は、「和装にこだわらずベルトやショールなどの洋装や、照明器具、スクリーンといったインテリア製品などジャンルを広げ、個展などで発表しています」という中内さん。中には幅60センチ、長さ3メートルのタペストリーなど、もはや“紐”とは呼べない大型作品もあります。「個展で直に消費者の評価を聞くと、手応えを感じます。くみひもの可能性はまだまだ広がっていきますね」と、中内さんの創作意欲はますます高まっています。

しかし、新製品や新市場への挑戦だけでなく、くみひも技術の伝承も中内さんにとって大きな課題です。「大勢の工芸士がおられますが、次の世代へ技術を残していくだけでなく、くみひもの歴史や文化なども伝えて理解者を増やしていくこと。それが工芸士の役割です」と想いを語る中内さん。市民のカルチャー教室で講師を務めたり、地元の美旗小学校でくみひもクラブの指導にあたり、「モノづくりを体験して嬉々としている子どもたちを見ると、私も嬉しくなります」

工芸士は語り部でもある、という中内さん。伊賀くみひもが、人々の意識や暮らしの中に自然とくみひもを取り込んでいくことを願い、創作活動や普及活動に取り組んでいます。

※：金属に細工を施す美術工芸



必要な玉数の糸を用意し、この後、組玉に巻いていく。同じ帯締めでも強く締めると糸の消費量が増えるため、組子一人ひとりのクセに合わせて長さを変える。



Topics トピックス

近代化産業遺産
平成19年度 経済産業省

近代化産業遺産とは？

経済産業省は我が国産業の近代化に大きく貢献した「近代化産業遺産」について、地域史、産業史を軸としたストーリーに基づき、「近代化産業遺産群33」として取りまとめました。それらを構成する近代化産業遺産が地域活性化に役立つ資産として認定されています。

当館の建物および所蔵物が「近代化産業遺産」として認定を受けました。(2007年11月)



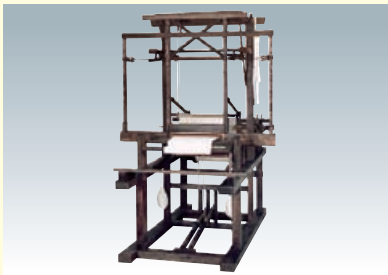
豊田自動織布工場(現・産業技術記念館)



豊田紡織(株)本社事務所(現・トヨタグループ館)



豊田商会事務所



豊田式木製人力織機



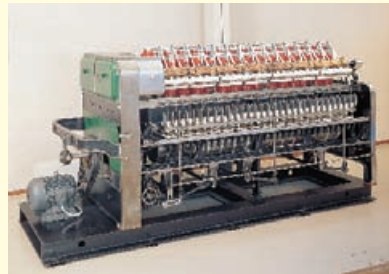
ガラ紡績機



豊田式汽力織機



無停止杼換式豊田自動織機(G型)



スーパーハイドラフトリング精紡機



環状織機



材料試験室



試作工場



トヨタG1型トラック



トヨタスタンダードセダンAA型

5月30日に秋篠宮殿下が来館されました。トヨタAA型乗用車、G型自動織機などをご覧になり、豊田副理事長、布施館長の説明に興味深く耳を傾けておられました。



地球環境保全活動を推進するオーストラリアからは、6月10日にラッド首相ご一行が来館され、環境対策を始めとしたさまざまな自動車技術を熱心にご見学されました。



インフォメーション

都合により、変更させていただく場合がございます。詳しくは産業技術記念館までお問い合わせください。

夏休みワークショップ ～親子で作ろう!夏休みの思い出～



7/26(土)～8/3(日)

恒例の当館オリジナルのモノづくりイベント。「風鈴」「シリンダブロックのペン立て」「ビニールアートのキーホルダー」「絞り染めうちわ/エコバッグ」などが気軽に楽しく作れます。

赤レンガの宵物語 ～動力の庭 屋外レストラン～



7/29(火)～8/10(日)

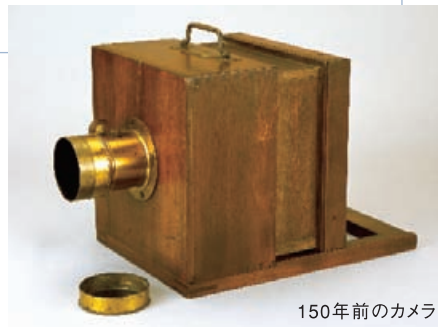
ライトアップした赤レンガに囲まれて、ジャズライブ演奏を聞きながら美味しい料理や生ビールをお楽しみください。

予約専用ダイヤル：052-229-8571

企画展トヨタコレクション 来て・見て・覗いて レンズからくり 江戸・明治



100年前の幻灯器



150年前のカメラ

8/9(土)～9/7(日)

江戸後期から明治時代にかけての、レンズを利用したさまざまな機器や生活道具を紹介します。実演コーナーでは100年前の幻灯器による映写と、150年前のカメラによる試し撮りを行います。

モノづくりカルチャーセミナー



9/6(土)・7(日)、13(土)・14(日)

本物のトヨタカローラのエンジンを使って、親子で楽しく学べる「エンジン分解・組付教室」を開催します。(事前申し込みが必要です)

秋の企画展

10/15(水)～11/30(日)

「安全」をテーマに、最新技術を紹介する予定です。

夏休み期間(7/19～8/31)は
小学生 **観覧無料!!**

当館ミュージアムショップで人気のオリジナルグッズです!

プルバックミニカー

各税込 ¥630

館内に展示してある初代クラウン、初代カローラの手のひらサイズのミニカーで、後ろに引っ張ると軽快に走ります。



Pロボ君 携帯ストラップ

税込 ¥300

(組立キット)

当館南口ビーでトランペット演奏する「トヨタパートナーロボット」のミニチュアです。

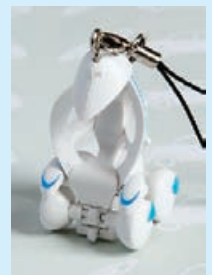


アイユニット 携帯ストラップ

税込 ¥400

(組立キット)

館内に展示してあるパーソナルモビリティ「i-unit」のミニチュアです。



新登場!



開館時間・休館日

- ◆開館時間 9:30～17:00(入館は16:30まで)
- ◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日)・年末年始
ただし8月11日(月)は開館します

観覧料

- ◆大人(大学生含む) 500円 ◆中高生300円
- ◆小学生200円
- * 団体割引 30名以上は1割引、100名以上は2割引
- * 学校行事での来館(引率の先生は無料)
- 大学生・中高生は半額、小学生は無料
- * 障害者手帳をお持ちの方と同行の方1名も無料
- * 65歳以上の方は無料

Vol.47 発行日/平成20年7月 編集・発行/産業技術記念館



トヨタテクノミュージアム
産業技術記念館

〒451-0051
名古屋市西区則武新町4丁目1番35号
TEL052-551-6115 FAX052-551-6199
<http://www.tcm.it.org/>



交通

- ◆名鉄「栄生駅」下車、徒歩3分 ◆地下鉄「亀島駅」下車、徒歩10分
- ◆市バス/名古屋バスターミナルレモンホーム10番のりば「名古屋駅行(循環)」「産業技術記念館」下車、徒歩3分
- ◆なごや観光ルートバス「メーグル」(土・日・祝日運行)/名古屋バスターミナルレモンホーム 0番のりば ◆無料駐車場:210台